

「創造」と「工夫」 伝統を未来につなぐ

萬古焼中興の祖～森有節～

紫泥の急須や土鍋など、萬古焼は、四日市市の地場産業として有名です。その発祥は、桑名の豪商沼波弄山が江戸時代の元文年間（1736～1740）に朝日町の小向に窯を開いたことにさかのぼります。弄山の没後、萬古焼は一時途絶えましたが、桑名の田町に生まれた森有節が、弟千秋とともに小向の名谷に窯を開き、1832（天保3）年、萬古焼を再興しました。

有節は、急須の成形に特殊な木型を使用し、量産を可能としました。急須の内部には龍が浮き出るように木型にその文様を刻みしました。

また、鮮やかな桜色の釉薬の開発にも日本で初めて成功し、世の喝采を浴びました。

これらの業績により、有節のつくり出した萬古は「有節萬古」と呼ばれ、「萬古焼中興の祖」として、その名は現在でも語り継がれています。

学習のめあて

森有節は、一時途絶えた萬古焼を再興した人物です。有節の作品は、造形が精巧で、桜色の釉薬（うわぐすり）による見事な色彩が特徴です。有節は、特殊な木型による急須の製作方法を独自に開発し、鮮やかな桜色の釉薬の開発にも日本で初めて成功しています。萬古焼の名のいわれは、開祖である沼波弄山が、その作品が後世まで永く伝わるようにと、「萬古不易（「いつまでもかわらない」という意味）」という印をおしたことに由来します。有節は、弄山の孫のもとを何度も訪ね、作品に「萬古」の文字を使用することを許されます。有節は、「萬古」の印のそばに「有節」の印をおしていますが、これは、単に「萬古」印をおすのでは申し訳ないという思いによるものとも言われています。

有節が萬古焼を起こした弄山に抱いていた気持ちや、新たな創造や工夫を重ね、萬古焼を再興した有節の意志の強さや生き方について考え、話し合ってみましょう。

考えてみよう

- 1 森有節が新たに開発した萬古の技術は、どのようなものでしょうか。
- 2 森有節は、一時途絶えた萬古焼を、どのような思いで再興したのでしょうか。
- 3 森有節は、沼波弄山にどのような思いを抱いていたのでしょうか。
- 4 森有節は、自分の作品に、どのような気持ちをこめて、「萬古」の印をおしたのでしょうか。
- 5 森有節が新たに技術を開発し、創造や工夫を重ねた理由を考え、森有節の生き方について話し合ってみましょう。
- 6 自分たちの地域に伝わる、萬古焼のような伝統工芸品について調べてみましょう。



森有節（朝日町歴史博物館寄託資料）



有節作の酒器（朝日町歴史博物館委託資料）

森有節

森有節（1808～82年）は、長らく^{すた}廃れていた
萬古^{ばんこ}焼^おを惜^おしみ、弟・千秋^{せんしゅう}とともに、その復興^{ふっこう}に
力^{ちから}を注^{そそ}ぎました。

好奇心^{こうきしん}のとても強い人で、ランプなど新しいもの
をいち早く^{こうじゅう}購入^こしたということです。

こうした性格^{せいかく}は、作品を作る上で大いに^{はつき}発揮^はされたこと
でしょう。また、陶器^{とうき}だけでなく、博物^{はくぶつ}
学^{がく}を研究^{けんきゅう}するなど、幅広い^{はば}知識^{ちしき}を持つ^もつ教養^{きょうよう}人^{じん}とし
ての一面^{いっぺん}を持ち合^あわせていました。



森有節（個人提供）

森有節の作品



腥臙脂釉菓子器（朝日町歴史博物館蔵）

森有節が絵付けの時に使った^{ゆうやく}釉薬^{（うわぐすり）}は軟彩^{なんさい}と呼ばれるもので、有節はこの
釉薬^{ゆうやく}を重ねて^{もりえ}盛絵^{ぎぼ}の技法^{さいしよく}で彩色^{さいしよく}しました。

腥臙脂釉^{しゅうえんじゆう}（左上の作品に使用）は、有節の作品にみられる^{とくちゆう}特徴^{きざら}のある桜色^{さくら}の釉薬^{ゆうやく}で、軟
彩^{なんさい}の一種^{いっしゆ}です。この色を出すには、原料^{げんりょう}をかきまぜるための時間^{じかん}がかかり、特に苦心^{くしん}した
と伝えられています。

薄^{うす}い腥臙脂釉^{しゅうえんじゆう}の上に、濃^こい腥臙脂釉^{しゅうえんじゆう}で模様^{もよう}を描^{えが}くのは、有節の得意^{とくし}とした技法^{ぎふ}です。

急須^{きゅうす}の製作方法^{せいさく}

有節^{ゆうせつ}が提灯^{ちようちん}を作る型^{かた}からヒントを得^えて作り出^だした急須^{きゅうす}の製作方法^{せいさく}は、「木型^{きがた}」を使^{つか}ったものです。

木型^{きがた}の上から土^{つち}をかぶせて形^{かたち}を作^{つく}った後に、いくつかに^{ぶんかい}分解^{ぶんかい}して木型^{きがた}を取り出^だす仕組み^{しくみ}になって
います。

この急須^{きゅうす}は薄^{うす}く軽^{かろ}いものに仕上^{しじやう}がり、同じ型^{かた}のも
のが大量^{たくりやう}生産^{せいさん}できるという利点^{りてん}がありました。

さらに、木型^{きがた}の表面^{へんめん}に彫^ほられた龍^{りゆう}の文様^{もんよう}が急須^{きゅうす}
の内側^{うちがわ}に現^{あらわ}れるようになっていたり、手の先^{てのさき}に付
けられたリング状^{かざ}の飾^{かざ}りや、つまみ^{つまみ}の部分^{ぶぶん}がまわ
るようになったものなど、画期^{かつき}的なものでした。

『復興萬古—有節が求めたもの—』（朝日町歴史博物館）
から作成



木型（分解したもの）



木型（組み立てたもの）

沼波弄山^{ぬなみろうざん}から森有節^{もりゆうせつ}へ ～「萬古不易」^{ばんこふえき}～

萬古^{ばんこ}焼^{やう}という名称^{めいしやう}は、沼波弄山^{ぬなみろうざん}が、その作品^{さくひん}が後世^{こうせい}まで永^{なが}く伝^{つた}わるようにと、「萬古不易^{ばんこふえき}」
という印^{いん}をおしたことに由来^{ゆらい}します。有節^{ゆうせつ}は弄山^{ろうざん}の孫^{まご}へ、自分の製作^{たうき}した陶器^{とうき}に「萬古^{ばんこ}」
の印^{いん}をおす許^{ゆる}しをもらうため何度^{たず}も訪^{たず}ねました。この時^{とき}、単^{ただ}に「萬古^{ばんこ}」印^{いん}をおすのでは申^{まを}
し訳^{わけ}なく、また、世間^{せけん}の人々^{にせもの}も偽物^{にせもの}と勘違^{かんちが}いするので、そば
に「有節^{ゆうせつ}」の印^{いん}をおすことを望^{のぞ}んだということです。

これにより「萬古^{ばんこ}」の文字^{もじ}を使用^しすることが許^{ゆる}されました
が、弄山^{ろうざん}が用^{もち}いた印^{いん}は与^{あた}えられなかったということです。

「萬古不易」の印
（朝日町歴史博物館提供）

三重県史編纂グループWebページから作成